

八木光則 提出 学位申請論文

『古代蝦夷社会成立史研究』 審査要旨

論文の内容の要旨

本論文は、序論・古代蝦夷研究の成果と視点、第一部・蝦夷社会成立への胎動、第二部・蝦夷社会の集落と墓制、第三部・末期古墳副葬品からみた蝦夷社会の交流、第四部・北海道における擦文文化の成立、結論・蝦夷社会の成立、からなる。

序論では、蝦夷社会成立に関する諸説を概観し、蝦夷社会成立過程の解明には集落や末期古墳のありかた、さらには続縄文文化の詳細な考古学的検討が必要であり、かつ支配を企図する国家とこれに対応した蝦夷双方からの視点が不可欠と説く。

第一部は、第一章蝦夷社会成立までの東北北部社会、第二章古墳文化の進出と前方後円墳体制からの乖離、第三章まとめ―蝦夷社会成立への対流、の三章からなる。第一章では、本州の弥生時代から古墳時代にあたる時期の東北と北海道を概観し、この時期の東北と北海道が竪穴住居が無く、墳墓にも階級性が無い、本州とは異質な非農耕社会を形成していたとし、これを「プロト蝦夷文化」と名付ける。第二章では、古墳文化が波及した五世紀後半から六世紀初頭の東北北部が北海道の文化とも密接に繋がっていたとする。他方、東北における前方後円墳や大規模古墳群の分布と後の陸奥国造の分布から、評が設置された大化五（六四九）年以前にはこれらの地が大和王権の支配下に組み込まれていたとする。第三章では、続縄文文化後半期に不安定な気候による人の流動が起こった結果、縄文時代以来の石器に依存する遊動的採集経済社会（北海道）、少量の石器と多量の鉄器に依拠する遊動的非農耕社会（東北北部）、鉄器と竪穴住居による定住農耕社会（東北中南部）がそれぞれ形成されていたとする。このうち、東北北部から

道央までを後に蝦夷と呼ばれた人々の居住域であったとし、この範囲が「プロト蝦夷文化」圏であったとする。他方、王権による蝦夷概念が成立したのが、前方後円墳の築造が停止して大和の王権から乖離した結果、国造制の施行外となった六世紀とし、関東系土師器が出現し始める六世紀末～七世紀前半に王権からの領域化が図られ、王権からの干渉と強制、侵略、これに対する抵抗と服従が『日本書紀』の「反逆」「服従」記事に反映されたとする。

第二部は、第一章古代蝦夷集落、第二章末期古墳、第三章まとめ―蝦夷社会の集落と墓制、の三章からなる。第一章では、北上川上中流域・馬淵川流域・三陸沿岸の集落を取り上げ、東北北部に古代集落が成立したのが六世紀末～七世紀前半であったとする。第二章では、東北北部と北海道にみられる古墳時代終末期から平安時代までの群集墳を「末期古墳」と規定し、馬具・衝角付冑・大刀・耳輪・釧・須恵器を副葬する七世紀型、蕨手刀・銚帯・和同開珎・須恵器・土師器を副葬する八世紀型、土師器・須恵器を副葬する九世紀型へと変化したとする。こ

これらの末期古墳が北上盆地中央部と都母に出現し、次第に北上して三陸・八戸・石狩低地帯へと拡大する中で、円形周湊墓に移行したとする。第三章では、六世紀末～七世紀前葉の東北北部に古代集落が出現したことを、古墳寒冷期の遊動生活から脱却して定住化が進んだ結果と見なし、この定住化を受けて国家による蝦夷国境の策定と国造制の施行が推進された結果、国造制から外れた民が蝦夷と呼ばれ、国境外への移民と支配領域の拡大、誇大な蝦夷服属儀礼が複合的に実施されていったとする。しかし、同じ蝦夷社会とはいっても、北上川下流域・北上盆地・閉伊地方と青森・石狩低地帯とでは古墳に地域差が見られ、この地域性が王権による身分表象や人名表記、城柵官衙の設置などの律令制の浸透度、さらには在地勢力の台頭と相俟って、一一世紀まで続いたとする。

第三部は、第一章馬具と武器・武具、第二章和同開珎と鍔帯、第三章まとめ―末期古墳の副葬品、の三章からなる。第一章では、末期古墳から出土する武器・武具・馬具・帯金具・環状金属製品の出土情況、型式変化、年代を述べたうえで、

方頭大刀の形状と規格に地域差が見られない一方、蕨手刀に顕著な地域差が見られる原因を、方頭大刀が国家公認の武器であったのに対し、蕨手刀が各地で製作された国家の関知しない武器であったからとする。第二章では、蝦夷社会と国家との関係を象徴する遺物として和同開珎と銚帯を取り上げ、和同開珎に関して、奥羽では末期古墳出土品が最も多く、逆に国家の出先である城柵官衙遺跡からの出土が微々たるものであること、奥羽でも北奥羽に多く南奥羽に少ないこと、皇朝十二銭の中でも和同開珎が主体をなし、萬年通寶以後の貨幣が限られていることなどの理由から、末期古墳に副葬された和同開珎や銚帯が朝貢の見返りとしての外位叙位・公姓賜姓に伴う禄物としてもたらされた物であり、蝦夷が朝貢や朝賀参列を許されたのは、彼らが渤海蕃客とともに、編戸民（公民）でなく、化外の民であったからとする。ただし、蝦夷地から出土する銚帯や石帯が衣服令に規定された官位制と必ずしも一致しないことから、畿内を遠く離れた地域ではその使用がかなりゆるやかに運用されていた可能性が高いとする。第三章では、末期

古墳の副葬品のうち、七世紀以後の武器・武具・馬具が国家系武装、東国系武装、蝦夷系武装、大陸系武装に区分できるとする津野仁氏の説を受けて、蝦夷地から出土する国家系・東国系の武器・武具・馬具が実態としては東国からの移入品であり、蝦夷系とされるものも東国で作られたものとする。七世紀型の副葬品を特徴付ける馬具に関しては、『扶桑略記』『類聚三代格』等に現われる馬匹交易によって蝦夷地にもたらされたものとする。

第四部は、第一章石狩低地帯における擦文文化の成立、第二章渡島半島における土師器の導入、第三章まとめ―北海道における擦文文化の成立、の三章からなる。第一章では、『延暦二十四年改定輿地図』その他の地図に記された「止之島」が「渡嶋」であり、北海道を指すとし、斉明紀に記された熟蝦夷の領域を新潟平野北部・山形県置賜盆地・仙台平野近辺、麓蝦夷の領域を山形県北部・秋田県・宮城県北部・岩手県全域・青森県東部に充て、麓蝦夷と都加留が渡嶋との交流に関わっていたとする。第二章では、渡島半島の太平洋側と日本海側で竪穴住居の

出現時期と土器系統に差が見られる原因として、古くから続く太平洋側と東北との交易・交流に加えて、八世紀後半以後秋田県などからの日本海ルートが始まったためとする。第三章では、石狩低地北部・石狩低地南部・渡島半島での竪穴住居の出現と土師器の流入を、北海道の蝦夷が国家との関わりを強めていった証拠とする。しかし、この現象を本州からの移民とする説に対しては、土器の製作技法・文様構成、「北海道式古墳」の構造などに東北とは異なる要素が多いことを挙げて否定し、北海道におけるこれらの変化があくまでも文化の流入に伴う在地的な変化であったとする。

結論は本論文全体を総括したものであり、第一章蝦夷社会の成立過程、第二章蝦夷社会の地域性、第三章蝦夷社会の特質、の三章からなる。第一章では、定住と農耕を基盤として古墳文化が発達した本州とは異なり、遊動生活を基盤としたプロト蝦夷社会を母胎とし、これに古墳文化が加わって生まれたのが蝦夷社会であり、その範囲を仙台平野から北海道西南部、その年代を文献記録上は六世紀後

半以後、考古学的には六世紀末から七世紀初頭であったとする。そして、蝦夷地の中で最初に古墳文化の影響を受けたのが仙台平野と大崎平野を中心とする地域であり、六世紀末～八世紀前半に仙台平野と大崎平野に関東系土師器が流入したこと、七世紀後半の東北に囲郭集落が出現する現象をもって関東からの移民とする説に対しては、住居構造と土師器に在地性が色濃く認められることを挙げて否定する。第二章では、文献記録に見られる蝦夷の地域性と考古学的事象とを総合した結果として、東北から北海道までの蝦夷社会を、A地域（阿武隈川流域以南）、B地域（仙台～大崎平野）、C地域（遠田・栗原・桃生地域）、D地域（北上盆地）、E地域（馬淵川流域・三陸海岸）、F地域（北海道西南部）に七区分し、その差異を多岐にわたって詳細に論じる。第三章では、集落構造と末期古墳のあり方を総括して、東北北部～石狩低地の蝦夷社会が首長制段階以前の階層化された部族制段階であり、社会的分業の発達と城柵支配からの脱却によって一〇世紀以後新たな段階へ移行したとする。

論文審査の結果の要旨

本論文は『古代蝦夷社会成立史研究』という表題の通り、古代蝦夷社会の成立過程について、主に六世紀から七・八世紀にかけての東北ならびに北海道の歴史、文化の様相を考古学と文献史学の成果に基づいて時期ごとに追求し、かつ地域空間の接触や広がりをも射程に収めつつ体系的、総合的に論じて全体像を描出したものである。

蝦夷といえ、一般に東北北部の古代の住民が意識されがちであるが、東北北部の古代の考古学研究を牽引する提出者は、本論文において東北北部だけでなく、その周辺地域の東北中南部、特に北海道をも包摂した日本列島北方（北辺）の地域社会をも対象に取り上げ、歴史、文化の共通性と差異性を備える社会のトータルな歴史的成立の解明を意図する。近年、考古学ないし考古学と文献史学との共同作業により研究が精緻化する各地の蝦夷の実態を齊しく扱い、統一的に捉えよ

うとする提出者の研究姿勢、問題意識が窺われ、これが本論文の特色となっている。

その研究の課題と視角は、(1) 地域性、(2) 自立的発展、(3) 社会構造の解明、特に東北、北海道それぞれの地域の内的、外的インパクト、自立的発展を明らかにすることである。前者のインパクトは交流、交通、移動の語に置き換えることもでき、諸地域、諸集団間の物的、人的交流の様々な実態の解明を通して、多様な地域的展開が追究されている。それにも増して、蝦夷社会の南に中心のある日本国（古代国家）の王権・国家の支配策、なかならず東北の城柵（国府）との関係を重視する視点を強調し、併せて日本（倭）側の文化（弥生文化、古墳文化、土師器、須恵器）との接触、移入（受容）という視点から考察している。この考察の結果、東北は地域として五区分され、北海道南、道央は三区分されるとして、地域ごとの歴史的特性を析出する。東北の五区分はすでに文献史学の立場から言及されている説を考古学的事実によって裏付けたといえようが、東北と北

海道を包括し、蝦夷と呼ばれた人々の地域に関して、中央の国家体制や文化との関係、各地の自然条件、生産の違い、地域間の交流などを、集落、古墳、土器、馬具、武器、装身具、和同開珎などの出土遺物の系統などの議論を再検討しながら、プロト蝦夷社会、続縄文文化、さらに七・八世紀の蝦夷社会、擦文文化の成立と特色を考え、地域社会の全体構造に亘って明快に論述している。

このように、本論文は考古学ばかりでなく、文献史学の研究成果を可能な限り取り入れて、蝦夷社会の形成過程を総体的に解明しようとした労作であり、東北史、北海道史、北方史に関連する学界で看過しえない業績となることは間違いない。

しかし、本論文の全体を貫く論調、あるいは個々の事実認識に対しては、疑問や異論も出されるであろう。例えば、提出者は東北北部の蝦夷社会の成立を住民の定住化とともに、城柵の造営が集落形成、階層化に及ぼした影響を重大視し、日本国との三十八年戦争期の盟主的村落を中心とする社会統合、終結後の城柵支

配体制下での再編という根幹となる事実を説く。あるいは三十八年戦争の外圧下での階層社会の形成が有力者の広域祭祀権、集落間の利害調整、日本国との対外交渉権、合議調整役をもたらしたが、発展段階は部族制であったとする。これらの見解については、さらに九世紀以降の展開を見通した議論の深化が期待される。蝦夷社会として文献に見える渡嶋蝦夷の考古学的解明がなされるが、彼らを管轄する出羽国や、交流、交易のある出羽、秋田、津軽などの蝦夷についての記述もやや不足している。また、日本国側からの記録はあるものの、蝦夷側の記録はなく、本論文が対象とする地域が先史時代的な様相を色濃く残していることからすれば、飛鳥時代以後を対象とする歴史考古学の手法と同時に、縄文時代の研究を通じて深められてきた先史考古学の手法も求められよう。

以上、いくつかの課題を有するとはいえ、本論文は日本列島の古代・中世の国家史、地域史が抱える課題の究明に大きく寄与するものであり、本論文の提出者八木光則は、博士（歴史学）の学位を授与される資格があるものと認められる。

平成二十二年（二〇一〇）年七月十四日

主査 國學院大學教授 吉田 恵二 ⑩

副査 國學院大學教授 鈴木 靖民 ⑩

副査 國學院大學准教授 谷口 康浩 ⑩

副査 東北学院大學教授 熊谷 公男 ⑩